

續

巻  
原

天



又とせよ、やうな先乃向の  
御借書は、概を以てしり、  
本一、今續の魚乃津、  
おしきまき、心、  
今、  
都の、  
おく、

たうらひし  
幾さき  
月の様か  
柳  
つゆあふ  
伝ふ

一柳軒不卜

一番

左芥持

まにまに  
田芥うふ

奉白

右

あし  
あふ

二齋

おきぬ  
あし  
泥中  
芥と  
無優芥

二番

左 餅持

ふもやち〜〜るよ〜〜破清々

勇招

右

あ〜もやち〜〜るよ〜〜消息通

松風

左 詞を〜〜た〜〜粉内たまきや〜〜の  
右 折らるる落ぬ〜〜下場〜〜と〜〜  
い〜〜は〜〜く〜〜け〜〜は〜〜似本性か〜〜  
通〜〜く〜〜ろ〜〜ろ〜〜

若の〜〜あきよ  
修の〜〜あきの

三番

左 梅

あ〜梅を柳よ〜〜る〜〜

松濤

右 勝

より白〜〜あ〜〜き〜〜ひ〜〜

不角

暗香浮動月華昏

春の精氣〜〜た〜〜何〜〜と〜〜や〜〜た〜〜  
き〜〜は〜〜ら〜〜と〜〜他〜〜も〜〜あ〜〜ひ〜〜作〜〜は〜〜  
〜〜ひ〜〜と〜〜ろ〜〜ろ〜〜通〜〜

五十四番

左 蝶持

いけいふく 拾ふにたしげ、ひげふ

溪石

吾

おのの やより 似るぬこころみか

委取

おののこころみか 似るぬこころみか

左の 似るぬこころみか 似るぬこころみか

四十五番

左 五加持

うきうき 衣より おもふみか つか

映水

右

さきま つかみ つかみの 意 佛系

扇雪

左 おおる きききし

太 好く した 思ふ こと あり

おのの 佛 つかみ つかみ つかみ

似持る こと



八番

左 柳

大分力片巾を柳子

蚊足

右 膝

本巻の柳子巾を柳子

琴足

右巻の巾を柳子の巾と上巻と  
此の巾を二つに切る  
左巻の巾を柳子の巾と  
右巻の巾を柳子の巾と

九番

左 雲雀 膝

無分袖と心と花うら

真児

右

代子巾を柳子の巾と

立些

代子巾を柳子の巾と  
柳子の巾を柳子の巾と  
袖生一着 鞭

柳子の巾

拾番

左 木尻持

サトシ | や 芝 平 川 | 木尻の志

扈房

右

乃 乃 乃 | 乃 乃 乃 | 乃 乃 乃

紅林

左 乃 乃 乃 | 乃 乃 乃 | 乃 乃 乃

拾一番

左 木目持

鶯 <sup>ウ</sup> | 乃 乃 乃 | 乃 乃 乃

朱絃

右

暮 乃 乃 乃 | 乃 乃 乃 | 乃 乃 乃

鶴白

右 心 乃 乃 乃 | 乃 乃 乃 | 乃 乃 乃  
左 難 解 乃 乃 乃 | 乃 乃 乃 | 乃 乃 乃  
不 分 甲 乙



十二番

左 櫻持

櫻おら 漆色又 白と 志道也

石

不保 あり 竹 櫻 奉 ころ ころ 山 ころ ころ 不ト

左 左 田の あり あり あり あり あり

あり あり あり あり あり

あり あり あり あり あり

言ふ共乃友不ト子十解二つ一の  
白念を神子一あり一判をいふ  
相白入一くい一他の人様はまじ  
左 寧ろ 福あり あり あり あり あり  
ふれ 見 終の あり あり あり あり あり  
朱 ね 正 解 人 なる こと 非 妙 あり あり あり あり  
う あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり  
判 あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり  
素 崇 書

一番

左 卯花持

卯花の中へ入るもく朝

雲石

右

雪より春の心もよふ卯木

不卜

左 玉許の足り人も卯木のまゝのまゝの  
斤里をたたく足跡も一棹満酒出謀公衆の  
つきりたてふ心もつく作  
右 台町節乃らう所老急心も清女  
女らん心もつく作つく白ひあつて  
控凌のまゝの記

二番

左 麦持

村の牛遊りもは麦野ふ

招風

右

新道なるまのふ麦那く美能風ふ

調柳

麦野のふ牛を遊るもは招風の  
無かり  
右の招風の美能風ふもは招風の  
音能もく又おりの招風の

三番

左 筍 膳

招風の牛の子のやうに成る

金峯

右

古みちの華やけしー 且之申

不詣

筍の折は好種くは無らる一版も見さ  
すね又任まてしー古井とのやけしを遊  
長もあつてしー招風の音能もく左乃  
余情もは招風の音能もく

四番

左 田植

落乃花乃車をきくとも田植ふ

立止

右 膳

折々の姫々魚いん田くか

兼言

服母子の道との田井よりつとてとて  
まゝの草々れと艶一左も一紙片目  
たゝぬ所々々吾の勺乃姫ふまゝの中  
まゝにまゝを引くまゝたゝめ

五番

左 百合下膳

管沼尻一版のた乃子ありか

一柳

右

乙々もたのめり〜不念のま

破笠

たの勺鳥さくかまを脱ふぬは〜とらた  
まゝのたのこんが〜といふぬ斗の風情  
いと優〜と艶し  
右又〜とてたれんをたやま  
〜とてたれんをたやま  
たの不念のま

六番

五 鳥尾持

鳥尾をくも海をくも古亭初時

扇雲

右

紫のりりんくも鳥尾のそり

雨閉

古墳の鳥尾よむくん出く  
物ましらんまぬぬ  
いさささいはれとふくも

七番

左 夕顔持

夕顔のそりくも

玄来

右

夕顔のそりくも

調美

夕顔のそりくも  
夕顔のそりくも  
夕顔のそりくも  
夕顔のそりくも  
夕顔のそりくも

八番

左 蚊遣 膳

一節は樽を置て蚊遣りか 工齋

石

室へ通息ハ口をたし舟乃蚊遣り 溪石

左の勺樽を置て一節のそり出を  
右の勺を死木の蚊遣りせしむ  
左の室を置て蚊遣りせしむ

九番

左 軒 持

同何極中やとり求むる軒系 溪水

石

かき流れ中一ちる管系 心水

晩五くあり桶の銘を志しんくやと  
かき流れ中一ちる管系  
かき流れ中一ちる管系  
かき流れ中一ちる管系

拾番

左 蓮

雷之訓く修しふくまをの歌

勇招

右 晴

包両通くふとの雷く歌蓮ふ

野馬

左の道ハある一の雷の雷より修れけり  
而も修る右ハまを在ふの道よりついでて  
多々の修しふくまをの歌  
牛のなる修しふくまをの歌  
叶いれハよれ脚く定修け

十一番

左 涼 晴

舟よをふけしに暮をす修けり

不角

右

舟のけしや校も修りし中よ涼

琴風

左の道ハある一の雷の雷より修れけり  
而も修る右ハまを在ふの道よりついでて  
多々の修しふくまをの歌  
牛のなる修しふくまをの歌  
叶いれハよれ脚く定修け

十二番

左 清々持

掃除くまなく人の清々可奈

風水

右

踏踏入るる屋敷志く何う奈

風水

左よりよりの風前中氣を抜ける事  
可なり人乃く計りて可く事なる  
所致清々ぬのころもくくくく

右又くまなく清々持

言を無くしぬん心を清々持

書く事

調和判



一番

左 初秋 勝

又月や陰と感もる 蚊屋の内

其角

右

秋風の心くこきと 籠もく 終

嵐雪

左、琪樹西風花筆秋といふ一秋の情よあつて  
いづく新涼の字空の国の中に入乃筆書くを人風  
洋中感するの字空の国の中に入乃筆書くを人風  
も心ゆくやとていづく籠もく 終  
清くゆくゆくも肌骨かぬて身心をさるとは一番の  
秋の事と伝ふ左は勝をいづくしとていづく

二番

左 雲

木村馬屋くろわな一牛の雲 吉川

右 晴

朝やうにははなはなとせむさうさ 藤吉

ちりちりにあともういひたてくわゆる  
かたみおのねのこり体佐藤かーく一  
子甲のい志者くみく借とP作あまのこ  
左判者のやーふあひくあとなーく

三番

左 稲妻 晴

稲妻平 ちりちりさうさくさくさく 大笑

右

稲つるにこくま借乃金うさ 石角

左稲つるのこくま借乃金うさ  
仰つてんあつたあつた中たを  
はは七のこくまのこくま借乃金うさ  
こくまのこくま借乃金うさ  
こくまのこくま借乃金うさ  
稲妻のこくま借乃金うさ

四番

左 考

言合中 凡火のあはき 考のこ

蚊足

右 晴

符もよ ぼるふふ 考乃 今下 ふう

扇雪

左 師匠のつ田の稲葉ふおとつと  
あふのきき 羅のくぬい 中 佐未乃 伴よよ 伴入  
ら 伴よよ 伴よよ 伴よよ 伴よよ 伴よよ 伴よよ  
今 伴よよ 伴よよ 伴よよ 伴よよ 伴よよ 伴よよ  
ま 伴よよ 伴よよ 伴よよ 伴よよ 伴よよ 伴よよ

五番

左 考 伴

かゝるくく びら 室 考のくつ 考

琴凡

右

巻ふ ふう ふう 考の 考の 考の

沾荷

左 ふう ふう ふう 考の 考の 考の 考の 考の 考の  
考の 考の 考の 考の 考の 考の 考の 考の 考の 考の  
考の 考の 考の 考の 考の 考の 考の 考の 考の 考の  
考の 考の 考の 考の 考の 考の 考の 考の 考の 考の

六番

左 駒込

野々月也ワの道運—— 駒ひび

調柳

右 膳

寺々や清きうきゆふのひび

二歳扇

左の性のふもまの上の二の舟きくとも合  
くはひのひびの魚のむむひての上の二の  
舟きくともまのひびとるむむひての上の  
右の清きうきゆふのひびのひびのひび  
ひびのひびのひびのひびのひびのひび

七番

左 薄持

折々々々。押々々々。窓—— 松

清

右

折々々々。押々々々。窓—— 仙

化

折々々々に難か—— 折々々々

八番

左 虫持

鳴てきた焼くつらき——

奉白

右

川株より引くつらき——

漢石

左の焼くつらき——さし込みまきしついでに  
あつた右の井おを掃くを井阿——いぐ茶と  
つらきとつらきの入りの口おを引く——お茶の  
守まのゆえま及びもあんな——つらきのお茶  
まはつ——左のまきしつらきおを引くつらき

九番

左 菊持

葉のふと葉のたのむのそらら

文鑑

石

牛吹く旭先てる。おまきくか

心水

葉野葉

おれ——さほらるる白ひた

つらきおを引く

拾番

左 菌 腊

虹波〜あ〜び〜ん〜に〜菌〜ふ

勇招

右

〜色〜に〜落〜る〜志〜く〜菌〜ふ

雨圍

左 木 び〜ん〜く〜湿〜さ〜く〜菌〜ふ  
右 菌 招 候 候 の も〜ん〜と〜ん〜ん  
〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん

十一番

左 秋 寂 持

秋〜〜 寂〜無 海乃口くれが

一 排

右

秋〜〜 誰〜さ〜る〜を〜修 池の巻

不ト

秋〜〜 長〜下〜〜〜〜 一〜と〜こ〜入〜善子  
〜善子〜を〜ぬ〜い〜〜〜〜 かく〜は〜は  
〜差〜あ〜い〜ま〜〜〜〜〜  
又 池の巻 善子の長 善子の不易の  
凡 佛の道 善子の長 善子の不易の

たうれらしく記持しり

筆をさすなり

洛陽

湖春書

一番

左 藤原持

藤つと木を葉よりしるす

風水

右

藤つと木を葉よりしるす

松涛

左のう景氣微細う心せり右は  
山よりしるす藤つと木の葉よりしるす  
中々にしるす藤つと木の葉よりしるす  
右のう景氣微細う心せり左は  
山よりしるす藤つと木の葉よりしるす  
中々にしるす藤つと木の葉よりしるす





四番

左 拓野 膳

松苗と杉母と目より風ふ

松風

石

大傍とうれせよらん 入りて形

金峯

左のちち松のふとく 首松のきりく 松のたけ  
多岐ゆのやうりな 月夜よりのし 松紅葉の  
まはるとぬくま ころもたき 石や又松野の  
風余と松くく ねれぬ 苗松のまや 月夜  
まはるく

五番

左 細作 持

子なつとく ねれぬ 細作の兼校

心水

石

細作木乃申とねや 氷の那

不角

細作の座敷子とつ ねれぬ 心水  
かたき 心水  
吾又あゝるの松の氷 氷のたけ 松のたけ  
心水 心水 心水 心水 心水 心水



八番

左 雲 持

あつきの雲のふとら 信こぼ之車

李下

後

右

木田くびるるふとら

仲風

烈風寒威時の森冬の西...  
あつきの雲のふとら 信之車  
木田くびるるふとら  
左のふとら

九番

左 氷柱

凡そまゝの氷柱さう 楓さう 一 排

先

右

膳

川邊下 雲を 申 氷柱さ

琴風

氷柱ささるる楓のうねる...  
川邊下 雲を 申 氷柱さ

拾番

左 神樂掛

御神樂の火と焼湯士とありし

左末

吾

神樂の火と焼湯士とありし

左末

左の白土の神樂の火と焼湯士とありし  
いふはみは神樂の火と焼湯士とありし  
神樂の火と焼湯士とありし

十一番

左 双中掛

山の中野野中一とありし

京

観水

吾

双中野野中一とありし

兼言

目其野野中一の客きし  
双中野野中一とありし  
吾と目其野野中一の客きし  
双中野野中一の客きし  
吾と目其野野中一の客きし

十二書

左 標 停

何より新くしらそらん標をひ

奉白

右 情

標をひきとらそらん標をひ

不ト

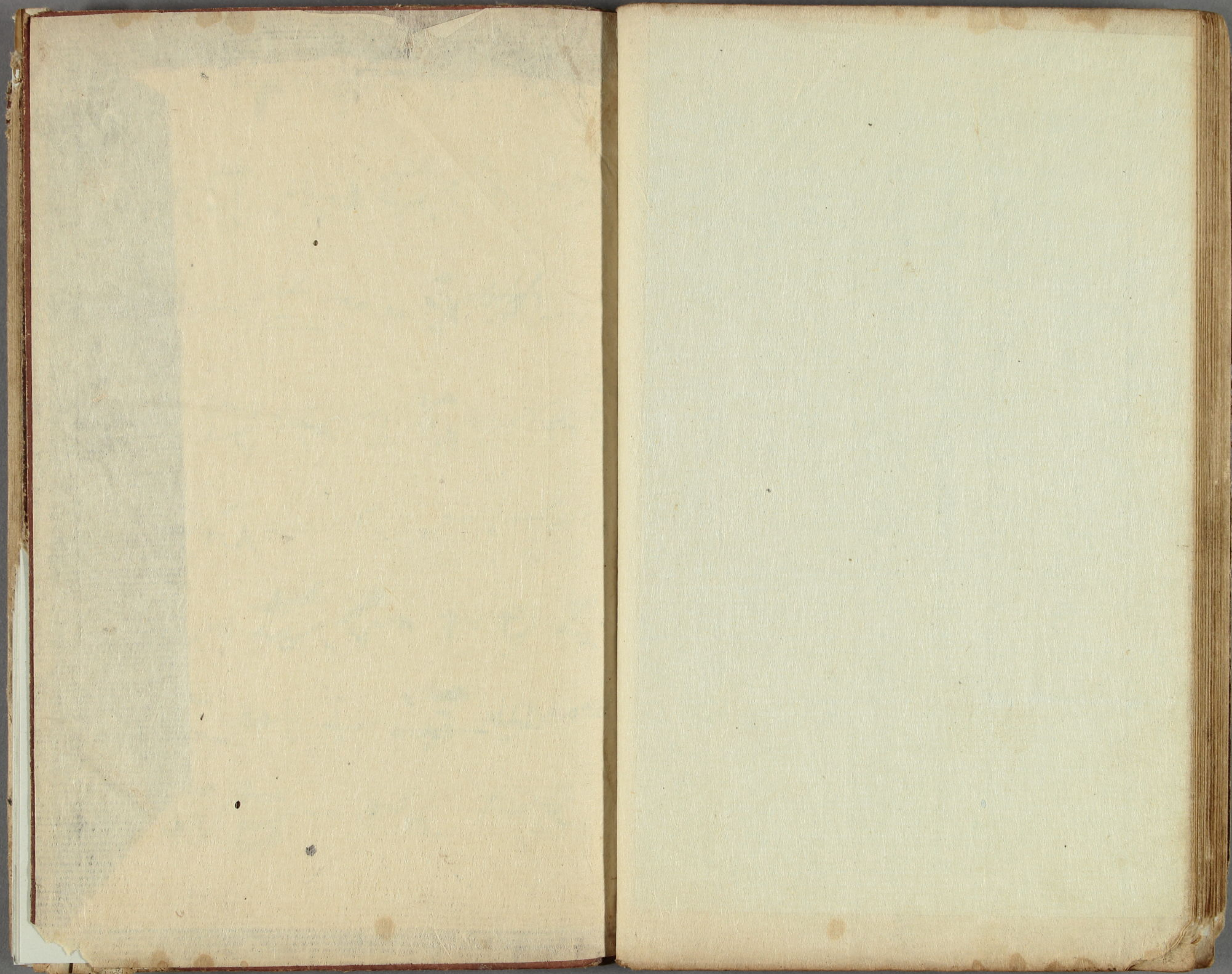
深所の抄紙を徒に傳へし難し各々其の  
下序と見ゆるもの先珍重なるもの傍に  
ありしとて一に感心すべしとて傳へし  
用ひし佛の心を一に傳へしとて傳へし  
中傳へしとて傳へし

一柳軒不トの意一、世を尊境に降し  
其傳へしとて一に感心すべしとて傳へし  
多しとて傳へしとて一に感心すべしとて傳へし  
自に記し置て一に感心すべしとて傳へし  
たるとして一に感心すべしとて傳へし  
り物とて一に感心すべしとて傳へし  
雲申きる目とて一に感心すべしとて傳へし  
とて一に感心すべしとて傳へし

黒くもしと毒乃億梯能無も折ゆぬに  
可中一とくく白も人なきあましむ  
松も志をきり林も入る花のよもあは  
きしんたよりふもくた木も花もあは  
るゆひひく左もつたにワのあまも積るも  
西路とたふ判士もくくくくくく  
あまもあまもあまもあまもあまもあまも  
あまもあまもあまもあまもあまもあまも  
あまもあまもあまもあまもあまもあまも  
あまもあまもあまもあまもあまもあまも

いふ事にはあまもあまもあまもあまも  
あまもあまもあまもあまもあまもあまも  
あまもあまもあまもあまもあまもあまも  
あまもあまもあまもあまもあまもあまも  
あまもあまもあまもあまもあまもあまも  
あまもあまもあまもあまもあまもあまも  
あまもあまもあまもあまもあまもあまも  
あまもあまもあまもあまもあまもあまも

排青書



續  
書  
原  
地



入道乃もくもくをくもく柳ふ

調和

菘のまゝくみ茶子向ふ家 不卜

陽春歌亭に題題のまゝて 挙白

古記小記中一母を 慮む 不卜用

三才白のまゝくたまふゆづ柳まゝ合 溪石

香いゆきまわらちうき 瓶のまゝ

尾なるく礎い川 幸う

あつに 藤乃 実を 移り

大由乃 藤乃 移り 移り 移り

室林乃 移り 移り 移り

る 移り 移り 移り

か 移り 移り 移り

中 移り 移り 移り

且乃 移り 移り 移り

室 移り 移り 移り

丁

丁

丁

丁

丁

丁

丁

丁

今と 移り 移り 移り

ソ川の 移り 移り 移り

友と 移り 移り 移り

いと 移り 移り 移り

か 移り 移り 移り

藤乃 移り 移り 移り

室と 移り 移り 移り

櫃乃 移り 移り 移り

不角

不角

不角

不角

不角

不角

不角

不角

藤とついでに丁一草

藤を根をうすむとむすし

よみん薬を服てふふ早る

そゆハ入種より藤より根引

あゝ——の用は次へる

馬鹿を立草押あはれ破法

中程うけりて後——林

天々無信乃菴の海きや

不角

不角

不角

不角

不角

不角

不角

不角

御湯を毎に野田の草

三ふくぬを集コレりて終り

油を煮て——油あへぬ

善人上苗をうすむ

そりも踏来り草鞋

調和

不卜

不卜

不卜

不卜

根少中節鐘のこね尾上る

才廣

妻より草下上る世の中

翠白

鷲突乃雜の雪より下る

下上

山名もたもこし こ 鷲の巢

溪石

月を入るおの浪のよと

松濤

慕るより同 こ 名 こ 家

十景

合歡と思ふ時 こ 記 こ 海

巾の如くそそくそとて入る。

物下のや甲斐の花も使の契りて 浮石

粽も花より花神の祈り初 松濤

艾葉アヲ通トシもけり〜〜〜素山よ 才磨

無く死にけり初を飾りて 萃白

つむろくに髪りふ傍の〜〜〜 不卜

麿ノシナ乃萃にまぬ庵 溪石

継橋乃く〜〜〜雪の跡 松濤

味死〜〜〜美豆野月 才磨

草鳥〜〜〜葉の森より 萃白

春〜〜〜左近乃輿 松濤

夕名花を剥花橋の短きト 才磨

下戸の海を〜〜〜種下す〜 不卜

年二人指し渡り細七畝 溪石

山を〜〜〜に仙音乃入 萃白

奇如く〜〜〜とて〜〜〜

思ひを〜〜〜

日

陣中〜〜〜書の装りいし

松濤

因ヒトナ機ナ破くりり々 念の黄昏

才磨

し冷し〜〜〜物〜〜ぬれぬ

萃白

花え〜〜〜下京の心

石卜

翁〜〜〜世々々並ひて

淡石

藤井ニ印〜〜〜末の子

松濤

藤垣ニを〜〜〜原年々

才磨

梅ニハナとニ思ニ〜〜〜權カキヲニ持ニ〜〜人

萃白

志同ニまニしたニキニのニのニ研ニをニ〜〜〜

石卜

遊女のニあニめニにニ秋ニ〜〜〜

淡石

夏秋ニもニあニるニ〜〜〜洞のニろニのニ色

松濤

鏡ニとニ老ニをニ〜〜〜

萃

西乃吉りろくく柳系

釜山

花ちるまは西月のいろ

不角

妻弱花情こころ一ひと柳やなぎ花はな

一柳

清水しみづの影かげ遊あそくし

以喉

そゆ花入はなくしくし雪ゆき初はつ花はな

扇雪

まゝくしくし花はな入いくしくし雪ゆき初はつ花はな

風

春もくもく霞よ雪のきこえ  
 冬もくもく雪よ霞のきこえ  
 折まくるる菊はくちあつぬきこ  
 不破をくちくハ雲斗キコナ黒き  
 なまんと遺るよまき秋のきこ  
 月丘一歌く常の末ハシク春  
 魁魁ハシク秋懐かふよまきりて  
 春車カシとくハ雷乃車轉カシ  
 不卜  
 一桃  
 不角  
 一桃  
 扇雪  
 琴風

春の氷掉るはる美 暮 一桃  
 奉加よくすハ俳優ハシクの暮 以喉  
 こくもくもく位はくちあつぬきこ  
 余はくちくす乃く焼つき 不角  
 沙ぬきくもく秋のなき送送のき 扇雪  
 角かきくハくハくハく鹿 琴風  
 優味実をくまきくハくハくハく 不卜  
 是はくちくハくハくハくハく 不卜



洋月を四つにわけて  
 第一の世に豊れ世間  
 第二の世に豊れ世間  
 第三の世に豊れ世間  
 第四の世に豊れ世間  
 第五の世に豊れ世間  
 第六の世に豊れ世間  
 第七の世に豊れ世間  
 第八の世に豊れ世間  
 第九の世に豊れ世間  
 第十の世に豊れ世間

大切の庭に花を散らす  
 人の名を後世に傳へる  
 ことなき舟を志す  
 僧の心は空の如く  
 志す人の情を風に乗せ  
 續の原を春の柳の巻

不角 不角 不角 不角 不角 不角 不角 不角 不角 不角  
 扇雪 扇雪 扇雪 扇雪 扇雪 扇雪 扇雪 扇雪 扇雪 扇雪  
 以喉 以喉 以喉 以喉 以喉 以喉 以喉 以喉 以喉 以喉  
 不卜 不卜 不卜 不卜 不卜 不卜 不卜 不卜 不卜 不卜  
 梳筆 梳筆 梳筆 梳筆 梳筆 梳筆 梳筆 梳筆 梳筆 梳筆

四角中極定り息山く

其角

大くしるるそそ女月湯を

跌水

立川維を躰よる大の鏡解

琴風

をの、嚏るる玉おしき

扇雪

水清く廊のトと行流き

不卜

涼い心いふく水きき

排

詠衣集ノ後ノ舟海  
 泣クらシんク和ス乃ク友  
 盜人孔書迹出乃ク世ノ  
 田植と志ノ道ノ稟ヲ  
 川ノ煩不驚花催一  
 人の魁不不畚畚  
 中ノの備を信いつく  
 心ノを所中ノ無  
 其角  
 不卜  
 一排  
 琴風  
 扇雪  
 其角  
 水

雲孔糟乃日ノき  
 不乃乃乃乃乃乃乃  
 志ノ乃乃乃乃乃乃  
 春乃朝乃乃乃乃乃  
 山乃乃乃乃乃乃乃  
 空乃乃乃乃乃乃乃  
 舟乃乃乃乃乃乃乃  
 菴乃乃乃乃乃乃乃  
 琴凡  
 扇雪  
 不卜  
 一排  
 其角  
 水

わー鴨の卵ワカらうる好コト 下ト 柳  
 舟フネ一葉中ナカの暖ヌク 不ト  
 阿きの夷ウチノの宿ヤド也ヤ視ミ也ヤ 峽セキ也  
 又マタ婦メの上ノ戸ノ親ニハ 之ノ角ノハ  
 狂言キヤウゲン也ヤ何ナニもモハ 既ス風カゼ  
 いふイフもモいふイフもモいふイフもモ乃ナラ察サツ 一ヒト排ヒ  
 白シロもモ一ヒト責ツク馬ウマ人ヒトをヲ後ノチ忘ワシ 不ト  
 奉ホウ吐ト幣ヒ乃ナラ後ノチ菊キク乃ナラ乃ナラ乃ナラ 扇アヒ雪ユキ

おーね千代チヨ柿葉カキ実野ミノの朝アサ也ヤ 之ノ角ノ  
 けくケク葉カ乃ナラ乃ナラ乃ナラ乃ナラ 峽セキ水ミヅ  
 茶チヤ果ミこコ乃ナラ乃ナラ乃ナラ乃ナラ 不ト  
 原ハラ取トル久ク一ヒト 乃ナラ乃ナラ乃ナラ乃ナラ 扇アヒ雪ユキ  
 直ナカ人ヒト乃ナラ乃ナラ乃ナラ乃ナラ 一ヒト排ヒ  
 雲クモ乃ナラ乃ナラ乃ナラ乃ナラ 既ス風カゼ

追加

系ノ柳ノミヤノクノ極ノ系

不卜

柳ノ白ハミヤノ系ノ集ニ

環凡

系乃流ノミヤノ系ノ系

其角

流ノ系ノ系ノ系ノ系

卜

系ノ系ノ系ノ系ノ系

風

系ノ系ノ系ノ系ノ系

角

道は長くそりた跡に  
空は遠くえり  
鉄もゆる櫻の紅敷の  
雲の奉加し船も  
ついでと葉の音茶<sup>キ</sup>姫<sup>キ</sup>  
あつと流るる魚を  
いりり一涸の粒も  
忘バのあつち一  
凡ト角凡ト角凡ト角

拾ふもぬ拾子の歌の  
つれづれかゝるかの  
自らの境を分る  
妻のあつちとよ  
谷<sup>谷</sup>衣<sup>衣</sup>たる<sup>た</sup>鞠<sup>鞠</sup>の女<sup>女</sup>を<sup>を</sup>負<sup>負</sup>こ<sup>こ</sup>い<sup>い</sup>  
帳<sup>帳</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>思<sup>思</sup>ひ<sup>ひ</sup>は<sup>は</sup>し<sup>し</sup>た<sup>た</sup>  
又<sup>又</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>い<sup>い</sup>り<sup>り</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>と<sup>と</sup>冬<sup>冬</sup>  
御<sup>御</sup>後<sup>後</sup>の<sup>の</sup>早<sup>早</sup>歌<sup>歌</sup>神<sup>神</sup>  
凡ト角凡ト角凡ト角

活鯉の庵丁とてとらふ  
 ち根あきとてし 畑のふか  
 岩あらしとて 屋正のふ  
 豆袋のし 偏る 葉たのふ  
 毛ふらふひし 里のふとて  
 卯男よりは 稲のふち  
 その目を 暖ふま 飽とて  
 作しとて 宗祖とて 林のふ

凡 角 卜 角 凡 卜 角 凡

やよふ 終とて 兎のふ  
 牛植のし 北花 透のふ  
 郭の 膝ふとて 膝子のふ  
 阪のし 月とて 宵の 盡  
 休日を 九の 御新のふ  
 山庄 とうとて 山あき

凡 角 卜 凡 角 卜 凡

續之原

春

物	物	物	物	物	物	物	物
〜	〜	〜	〜	〜	〜	〜	〜
〜	〜	〜	〜	〜	〜	〜	〜
不卜	不角	工齊	景道	文子	調	榊	榊

榊堂  
調榊



のり香よ夏のもけりよたうふ  
まふしりしもの花をる 松うふ  
幼森とて花をせしる雪うふ  
松うふ 沾蓬 翠白

春漸

竹の香や柳とる落のさう  
切り山も物たうしと柳さ  
風かきくさうと花名の柳か  
春柳の中よ夏のちりか  
そ角 才九 勇松 一芽

角田川

舟六十一風と春う柳か 石卜  
春柳も片笛中むらと小 調義  
割とけけしめのも花を軒端か 立些  
糸糸の鼻もくえる燕うふ 北竹  
ワツ人をとやうく花の燕うふ 渡石  
玉錦の袂しりしと花の燕うふ 調柳  
色とりや花うしと花の燕うふ 扇雪

而く紅のいしをとりつゝあか  
 下はふしとやかみか見むの際  
 けふふしの際の花を 朧 中  
 のうきか止つまゝなる 朧 中  
 行 跡の 冥 中 川 流 朧 中  
 小 笠 笠 笠 笠 笠 笠 笠 笠  
 かりにまゝ 笠 笠 笠 笠 笠 笠 笠 笠  
 吟 入 入 入 入 入 入 入 入

梁 木 乃 蟻 足 乃 蟻 足 乃 蟻 足  
 けしんく 乃 蟻 足 乃 蟻 足 乃 蟻 足  
 運 翹 の 白 山 と 菴 の 風 入 乃 蟻 足  
 乃 蟻 足 乃 蟻 足 乃 蟻 足 乃 蟻 足  
 乃 蟻 足 乃 蟻 足 乃 蟻 足 乃 蟻 足  
 乃 蟻 足 乃 蟻 足 乃 蟻 足 乃 蟻 足  
 乃 蟻 足 乃 蟻 足 乃 蟻 足 乃 蟻 足  
 乃 蟻 足 乃 蟻 足 乃 蟻 足 乃 蟻 足

重元 一 排 不 角 不 卜 由 之 一 排 吟 足  
 翠 角 冬 山 宇 齊 文 籜 淡 水 不 角 不 卜 由 之 一 排 吟 足

解つてゆく二りを籠の如く  
籠をとりていふ意のよきこと  
は下とやとくは雲か金か  
あまのつよのちのあまの仕業か  
裸ゆめよのあまのまゆか  
調柳 立些 石角 李下 三園

物皆自得

あまのつよのちのあまのまゆか  
芭蕉

月移花影上欄干

月影のひく植うも  
影をく流りか  
山標 松うは  
影乃鳴りか  
初さく風  
えさく  
笑し  
立寄り  
不卜 文麿 香山 溪石 一嘯 琴風 琴白 桐栞

春のふく鞠くるまのさくらが  
 梅言  
 山もさといふはあさくら守  
 梅言  
 行信も春の道は松極ま  
 湖舟  
 茶のふもとあはれしあつて  
 調味  
 行方乃信一お峰のさくら  
 由之  
 友ち〜〜は美のせり〜  
 湖舟  
 や〜〜は焼物もさくら〜  
 二園  
 菴や〜や峰は情よ白情  
 淡石

夏

三月正當三十日  
 風光別社苔吟身

大酒よ起〜〜の〜〜は裕ろ那  
 其用  
 根〜〜に葉〜〜を牡丹ふ  
 挙白  
 我々を〜〜  
 春の二葉牡丹〜〜  
 詞柳  
 吟上〜ぬ葉〜〜  
 三首  
 卯月〜や松のけ〜の〜  
 泊蓬

新世——昌あや——やあ、の軒 立世  
 稼草のむく女乃早苗うふ 調味  
 区るる川流ゆさる 稼うふ 調義  
 子を有るまぬかへ 田植か 溪石  
 迷舟の松くくをん 五月 雨 和水  
 又也人を并つてひける 子百念か 朱結  
 やまゝいゝか、松の原—— 軒 才丸  
 草の根と葉のまゝ ぬくる 雨 雨圍

花葉えくつ川も 蕉史のくも 紫 一排  
 野の眉ま、ま 葉のうら 小句か 全  
 煙とくく人、くく ぬか 坂をり 湖舟  
 あもあつ—— 二人のうら 木も 蝶の色 不角  
 家、くく 松と 松井、蝶の音 梅雀  
 地、くく 柳、 一声 麦のり 雨圍  
 木も 陰の鳥 うら 音 官をすくく 水 釜山  
 寺、縁、くく なる、くく 動きふ 琴風

一原に就て去るも思ひし  
 扇——く簾乃又人なるもく  
 帆中より舟無波りん徳は涼うか  
 中少涼翰をとる信くも舟無  
 舟と安く可定ぬす——舟  
 百八の声亦尋くもく——舟  
 涼——はあふこもせも舟無  
 目——月道——松も清も舟

由之  
 伸風  
 簾言  
 波名  
 扇雪  
 文子  
 不卜  
 松濤

い——やり氣をさる簾——  
 一もをや教くつ——舟圍——  
 舟のつにまつた波むらも也  
 凡舟の舟に歎ちた子も也

不瀟  
 簾言  
 芭蕉  
 不諱

一——舟の舟無波り

振葉の表をさる思ふ舟も  
 一——舟——舟無波り  
 一——舟無波り

不角  
 三圍  
 工齋

ふる平一居上のきは裕う事  
琴風  
ゆふとふと表面の備は清く  
溪石  
又立にりく然とふ思ふ人  
不卜

秋

六日のり後久しや女七夕  
不角  
七夕を流し海乃白舟男  
扇雲  
傘エりり私を望まんと向ふ  
溪石  
直宿よし一風とい星のワ道えん  
琴風  
竹土乃裸をやしりたお横まか  
不卜  
くは衣をきしに跡しや五横  
其角  
常山はくし乃らさちつくしき  
才丸

幕乃乃葛子一もはやる為小

台川

帆柱千一横 遠く詠る

調栴

横 君白ひ茶を女貴とるけ

立生

阿る向た小品乃乃果とるのし

梅菴

舞やも妃姫一々後海内

調義

馬為世系は松橋中宿てゆん

松濤

又自乃吸り 舞く灯籠こふ

比竹

品川一と歌れく伴一福のを

峻多

いづれを日ぬく進り秋の鐘

琴凡

松史の声より及今 牧訓家

夕口

茶の戸を段屋う花はく多び

不卜

草刈の暮 舞く次系こ外

伸風

立床 塔塔とるし歌 庭う那

鶴白

娘志くと松子をらるぬ 碁水

扇雪

百位名

くらく白のうへんくまか 多ひ

不角



野 栗 <small>ハ</small> 名の早 <small>イ</small> —— 柳 <small>ハ</small> の南 <small>ハ</small> 自 <small>ハ</small> の 楮 <small>ハ</small> 乃 <small>ハ</small> 実 <small>ハ</small> と <small>ハ</small> は <small>ハ</small> と <small>ハ</small> と 子 <small>ハ</small> の乃 <small>ハ</small> た <small>ハ</small> と <small>ハ</small> と <small>ハ</small> と 長 <small>ハ</small> の—— 乃 <small>ハ</small> た <small>ハ</small> と <small>ハ</small> と <small>ハ</small> と	秋 菊 九折 子 乃 <small>ハ</small> 中 <small>ハ</small> の 乃 <small>ハ</small> た <small>ハ</small> と <small>ハ</small> と <small>ハ</small> と	立 一 不 夕 三 文 拳	此 桃 卜 口 名 子 白
---	---	---------------------------------	---------------------------------

秋 乃 <small>ハ</small> た <small>ハ</small> と <small>ハ</small> と <small>ハ</small> と	調 不
--	--------

冬

やん乃早夜迄わくくられう

勇招

女々々々々々々々所乃所乃

文子

冬冬冬冬冬冬冬冬冬冬冬

琴凡

又こすれく冬冬冬冬冬冬冬

沾蓬

冬冬冬冬冬冬冬冬冬冬冬

調味

口の冬冬冬冬冬冬冬冬冬

不角

風冬冬冬冬冬冬冬冬冬冬

柳甫

而冬冬冬冬冬冬冬冬冬冬

立込二

那冬冬冬冬冬冬冬冬冬冬

白楊

冬冬冬冬冬冬冬冬冬冬冬

工齋

杜園と冬冬冬冬冬冬冬

冬冬冬冬冬冬冬冬冬冬冬

芭蕉

冬冬冬冬冬冬冬冬冬冬冬

月丸

冬冬冬冬冬冬冬冬冬冬冬

淡石

川冬冬冬冬冬冬冬冬冬冬

琴下風

暑より氷柱を解る色も那  
 帆柱乃氷柱を解る色も那  
 馬を走らす雪の河も那  
 柳雪の中も橋も那  
 草のまじりも雪のまじりも  
 垣越も雪も雪も那  
 漂木よりたぐれも那  
 一桃

芭蕉茶室

菊也つねにさの隈も那  
 楓も中風を解る色も那  
 香のたぐれも雪のまじりも  
 妹もくもくも雪のまじりも  
 行とくもくも雪のまじりも  
 秋食をくもくも雪のまじりも  
 不卜  
 立此  
 和水  
 浅山  
 梅萼  
 竹山  
 扇雪

坐右之銘

行々中強々に私々の切實之書

喜角

